



今後も吹田市が責任を持って運営してほしい…

誰でも安心してかかれる市民病院に

「理由なき民営化」=独立行政法人化は許せない

患者に寄り添った看護こそ
大切です… 山本恵子さん

吹田市が突然市民病院の「独立行政法人化」を発表

丹羽野 本日のテーマは、吹田市民病院の独立行政法人化問題です。昭和28年、吹田市出口町で開設された市民病院は、その後、昭和57年に片山町に移転して現在に至っています。最新医療を駆使した民間病院は人気がありますが、その分お金がかかる所が多いです。市民病院は、公立の病院として「平等、安心、安全の医療サービス」を提供してきました。

出席者
さつき福祉会 後援会長 山田 豊さん
吹田市民病院小児科病棟 看護師 山本 恵子さん
吹田市職員労働組合執行委員長 丹羽野 和夫さん

そんな地域に愛されてきた市民病院を、吹田市は突然、「直営方式をやめて独立行政法人にしたい」と発表しました。



独立行政法人という、何か大変難しく聞こえますが、要は「吹田市が病院経営から距離を置く」ということ。発表後、患者さん、地域住民、職員には不安と動揺が広がっています。そこで今回は患者家族代表として山田豊さん、職員代表として山本恵子さんにお越しいただいています。まずはお二人から自己紹介を。
山田 吹田市の障害者が働く場として、「さつき障害者作業所」がありますが、私はその後援会長をしております。長男が重度の障害者で、私たちが夫婦も高齢になって、市民病院には家族ぐるみでお世話になっているんです。独立行政法人化されると、「今まで受けていたサービスが削られ

ていくのでは？」と、大変不安に感じています。山本 市民病院の小児科病棟で看護師をしています。私たち職員にとっても寝耳に水の話でした。病院の仕事は激務の上に24時間態勢でしょう。今でも看護師、医師は慢性的な人員不足なのに、独立行政法人化されると、「利潤第一」になって、儲からない部門の医療がバッサリ削られていかないか、と心配ですね。
障害者作業所と市民病院はなくてはならない存在です
丹羽野 山田さんは西ノ庄にお住まいだとか。今でこそさつき福祉会の後援会長として、福祉や医療問題などご活躍ですが、仕事をしながらの子育ては大変だったでしょ

う？
山田 昭和44年、息子が生まれた時に、へその緒が首に巻き付いてしまって、酸欠状態になったんですね、それで、歩けないし、「てんかん」を持つようになりました。八尾市に住んでいたのですが、無理をお願いして普通の小学校に入学させました。でも私が転勤族で、東京へ。知らない土地で普通校に入ることはできないと思い、養護学校を探して、養護学校のそばに自宅を構えました。息子が養護学校の高等部に進む時に、名古屋へ転勤になりました。当時愛知県では養護学校が7つしかなく、定員が一杯で結果として息子は入れませんでした。
丹羽野 では、奥さんがずっと自宅？
山田 そうです。妻が毎日、24時間面倒を見ていました。住んでいたのが名古屋郊外の小さな町だったので、町役場に行って、「この町には、障害

者の行く場所がない。どこかに障害者と家族が集える場所を作ってほしい」と陳情したんです。言うて見るもんですね。役場の空き部屋を貸してくれて、同じような悩みを抱えている親子7〜8組が集まって、交流をはじめました。この時に「悩んでいたのはうちだけやなかった。障害者が集まれる場所が必要や」と感じました。
丹羽野 作業所のような場所が、当時はまったく不足していたのです。
山田 そうです。そんな時、妻の実家、つまりこの吹田市で「第二さつき障害者作業所が、もうすぐできる」という話を聞きつけて、それならぜひ入れたい、と。妻と子どもだけ、先に吹田に帰らせて、何とか入れてもらいました。
丹羽野 当時から吹田は「福祉の町」として有名で、障害者の作業所も全国に先駆けて補助してましたから

ね。一口に障害者福祉といっても、家族にとっては苦労の連続でしょう。作業所と市民病院はなくてはならないものです。
さて、市民病院の職場ではどんな反応ですか？
ゆとりがない、休めないが医療現場の実態です
山本 いよいよ来るべきものが来たな、と思いました。と、いいますのは、小泉改革の時代から、国は「赤字の公立病院は経営形態を変更せよ」と、指針を出していたのです。全国の公立病院は、「赤字をなくして黒字に」という競争状態でした。吹田市民病院も平成19年から経営責任者を置いて、その下に病院長がいる、という組織に変わりました。それから5年、直

障害者にとって本当に
有難い病院なんです…

